

日本国際ボランティアセンター／トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial&Error

No. 230



《特集》 JVC スタッフ 2003

「タイ・ノンジョク自然農園プロジェクト」終了

自然農業と自給自足を求めて

『余部さんのカンボジア活動日記』 - そこが聞きたい

『いつしか桃源郷に染まって』 - スタッフ(の連れ合い)のひとりごと

『日朝交渉』 - みるよむきく

『タイ・カンボジア・ベトナム・イラク』 - プロジェクトの現場から
国内ひろば

JVC Japan International Volunteer Center

6月号 2003
June

《特集》

JVC スタッフ 2003

2003年のJVC。中東・イラクでの活動も新しく始まりました。スタッフも1年で1/3くらいが交代。活動20年に近い古参スタッフ、新スタッフ、総勢78人が新たなチャレンジを始めます。

これまでの経験や今の関心、今年度の抱負など（好きな食べ物も!）を紹介します。（編集部）

■カンボジア■

七月に三度目の総選挙が行なわれる。選挙が行なえるということは、内戦が本当に終結したというひとつの喜ばしい証。だが、一月のタイ大使館の襲撃など、まだまだ課題は多い。

人々が安心して暮らせるよう、JVCの基本理念にもある「人と自然との共生」を忘れずに活動していきたい。

米倉雪子（代表）

学生時代にお世話になったカンボジアの人々に恩返しをいたく、今ここで活動しています。環境保全型の社会をめざし、国境を越えた協力をしたい。

◆ サッチウルターン（豚肉の炭火焼）

◆ ノップ・パウ（資料センター図書館員）

JVCで働く理由は、カンボジアの国や人々を支援したいから。企業と違ってビジネスを目的としないところがよい。

◆ サイモアンチャークニヤイ（鶏肉しょうが炒め）

◆ ケツ・チャントユー（資料センター図書館員）

専門学校でコンピュータを勉強。JVCでそのスキルをさらに伸ばすことができ。仕事の幅を広げるためにも現在英語を勉強中。

◆ チャー・ボンラエ（野菜炒め）

◆ チン・トラ（会計／総務）

最近の関心は、プノンペンの環境問題。ゴミにあふれ、空気が汚れている。きれいな街になってほしい。政府の対策とともに、一般の人びとの意識を高めなければ。

◆ ソムローマチュー（酸っぱいスープ）

高藤香里（現地インターン／調査・渉外補佐）

東京インターンを経て、この四月に赴任。着任早々クメール正月を迎え、歌って踊って笑いまくるカンボジア人の明るさと寛容さに感激。クメール語を習得するぞ!!

◆ 春巻、スイカ、マンゴ

◆ ウン・コック・エン（メイド）

勤続年は最長。掃除や飲み物の用意など、働きやすい環境をつくっていききたい。去年フランスのNGOが設立した病院で、弟が心臓の手術をして助かった。

◆ 野菜。教えてもらった「肉じゃが」も好き。

◆ チョアン・ソチエット（農村開発）

農業大学で学んだことや以前の他のNGOで得た経験が生かせると思い、JVCへ。今一歳になる子どもがいるが、JVCでは育児と両立できてよい。

◆ ソムローココ（野菜と炒り米のスープ、ソムローマチュー、プロホック（塩漬けし発酵させた魚

◆ キム・シモン（農村開発）

以前は他のNGOに勤務。活動を通して、自分のスキルと経験を向上させ、村人が学び合える関係をつくっていききたい。六月から産休予定。

◆ ソムローココ

◆ ソー・ソチエット（調査研究）

環境問題に関心がある。カンボジアはもとと、緑の豊かな国だった。無理に工業化せず、自然の大切さを認識し、資源を有効に使うべきだと思う。

◆ ソムローマチューオン（魚の酸っぱいスープ）



後列：米倉、パウ、チャントユー、トラ、高藤、エン、ソチエット（チョアン）、シモン、ソチエット（ソー）、ソン
前列：余部、ブン・ヒエン、リット、ヴィリャック、パン、ナリン

◆ ダン・ソン（門番）

役割は安全を守ること。事務所やスタッフに、常に注意を払っている。若い頃は、フットボールチームの選手だった。今もうフットボールで体を鍛えている。

◆ ソムローココ

余部徹（農村開発）

農業の近代化は生活の安定化に必ずしも寄与しない。それに代わる持続的な農業のあり方を地元の知恵の中から模索していきたい。

◆ 朝は、クイティオ（お米の麺）と練乳がたくさん入ったココア。

◆ ブン・ヒエン（門番）

以前は、軍人、金製造、ダイヤモンドの検査などの仕事をしてきた。会計や機械学も学んだ。JVCで働くようになってから家族が一緒に暮らせてうれしい。

◆ ソムローマチューオン

◆ パウ・リット（運転手／総務）

運転することでJVCの仕事がスムーズに進むようにしたい。休日は、家族とメコン川沿いを散歩するのが好き。

◆ ソムローココ

◆ ボク・ヴィリャック（農村開発）

他の国際NGOからJVCへ。農村にはまだまだ多くの問題があり、特に子どもが病気になることが多い。農民が自給自足できるよう、自分の経験を提供していきたい。

◆ ソムローマチュー

◆ ピン・パン（運転手／農村担当）

前はJVCの技術学校で運転手をしてきた。毎日のようにJVCのプロジェクト地と行き来しているが、今は危険も少なくなった。休日は自分の畑で農作業。

◆ ソムロークチイ（コナッツミルクスープ）

◆ チャン・ナリン（農村開発コーディネーター）

長い活動歴を経て、活動も安定。プノンペンでは平穩になった。人びとは良く働き、生活をよくすることに力を注ぐことができるようになったと思う。

◆ トウツクルン（塩漬け・発酵させた魚と野菜が入った料理。においが強い）

■ラオス■

ラオスでの活動は、十五年目を迎えます。今年は日本人スタッフの大半が入れ替わり、またカムアン県でのプロジェクトは、新たに契約を結び予定です。少しづつ、そして大切に築きあげてきた礎を生かしながら、今年もまた、新たなチャレンジが始まります。

スーカン・ウォンデット (フィールドスタッフ)
コメ銀行、簡易水道、農業。これらの知識や理論を、理解している村人もいる。JVCはお金をいっばい渡さず、知識を提供する。そして知識はずっと根付く。

◆ トムバー (魚のスープ)

小川 道夫 (JVCチャンプロジェクト担当)
現地事務所代表代行

JVCラオスでの仕事を通してたくさんの人と知り合うことができました。人との出会いが財産だと思います。

◆ カレーうどん、刺身、ゴーヤチャンプル



後列：スーカン、小川、カムコン



名村、サイサヌック、中村、ブンシン、プアソン

カムコン・クーンチャムヌン

(プロジェクト・コーディネーター)

今までいい活動ができたと思う。例えば、簡易水道によって村人は水を使えるようになり、技術も身に付いた。今後は、村の活動を強化していきたい。

◆ オットラム (干し肉と竹の子の伝統料理)

コンドウアン・ブッタチャーン (会計)

JVCで、会計、パソコン、書類作成、事務一般など多くのことを学んできました。自然農業は、言いつは簡単だが実践するのは難しい。

◆ コイパー (魚、炒り米、ミント、唐辛子のサラダ)

スワンニー・マントンディー (プロジェクト補佐)

JVCで学んだ農業の知識は、家族が農業をしているので、将来使うことができます。JVCのために最善を尽くしたい。

◆ タムマックフン (青パイパー、パデックのサラダ)

寺西 悦子 (会計/総務)

モノやお金ではなく、知識や技術を提供するJVCの活動の重要性を実感。成果はすぐに現れませんが、活動を「人から人へ」広げていきたい。

◆ 餃子、炒飯

名村 隆行 (プロジェクト・コーディネーター)

ダイネーター 森林保全

大学院で天然資源管理を専攻。モノを眺める立場の研究に疑問をもち、実際にモノを動かす活動に飛び込む。森と暮らすラオスの村人が、将来も幸せに暮らせるように、とこころをやるぞ。

◆ 醤油豚骨濃厚こつてらラーメン (だからこんなお腹に...)

サイサヌック・ピンパエーク

(プロジェクト・アシスタント)

森林学校で勉強し、JVCへ。

以来ずっと森林を担当している。今年は森林の「利用と保全」両方について村人をサポートしていきたい。

◆ カンママイカサン (豚肉・野菜のあっさりサラダ)

中村 咲野

(プロジェクト・コーディネーター 自然農業)

日本で住民参加のまちづくり「？」と感じていた頃、自分の頭、手、足を使ってしなやかに生きているタイの人に出会った。今はラオスで、私たちにできることを探索中。

◆ じゃがいも料理なら何でも好き。

ブンシン・サナホン

(プロジェクト・コーディネーター 自然農業)

昨年研修したPRA(参加型農村調査の手法)はとても興味深かった。これを今年活動に結びつけ、複合的な農業を実践する人が増えることを期待している。

◆ コイパー

プアソン・ケオウンカム

(プロジェクト・アシスタント ジェンダー)

ラオスの女性が自分の価値に気がつき、自分自身を好きになつて自信がもてるように助けていくこの仕事が気に入っている。

◆ タムマックフン

■タイ■

バンコク郊外のノンジョク、チェンマイ、コンケンとタイ事務所は三箇所に広がる。スタッフは、広大なタイの大地の移動を満喫。けれど、見つめているのは、目の前を行き交う人々の姿ばかり。

マヌーン・ムンチュー

(「地場の市場づくり」フィールドスタッフ)

大学時代のキャンパ活動が自分にいい影響を与えたと思う。

◆ ドブロー。何よりも米が好き。

松尾 康範 (代表「地場の市場づくり」担当)

どこの地域に行っても、おいしい食、おいしいお酒にありつけることを楽しみに、タイで「地産地消」の活動!!

◆ なまず焼き

森本 薫子 (会計/インターンシップ/フロント)

イ・スラム住民組織)

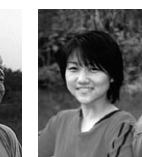
市場調査会社をやめて「タイの農村で学びインターンシップ」に参加。二期生。その後、JVCのスタッフとなり、今度は自分がインターンの世話をしている。

◆ ノンジョック農園メンバーの作る料理! 農園の野菜料理は最高!



パイロ・モンコンブン

(「地場の市場づくり」コーディネーター)



自分自身が住みやすく、人々が自立して生きていける社会を求めて活動している。公平でない社会構造が社会を困惑させている。大きな流れには流されたくはない。



マヌーン、松尾、森本、パイロ、木村

◆ 妻の料理。現在コンケンには単身赴任。妻の料理ならなんでもつまみ。



木村 隆夫

(「北タイ調査」担当)

昨年、大学の教員から転身。「カネ」第一のグローバルゼーションに席巻されつつある世界にあって、北タイの多様な文化や自然にもうひとつの人の暮らしを見つけれられるのでは、と模索中。

◆ 北タイは食べ物桃源郷! いまならマップラン(果物+形はハフ、味は巨峰)がよい。

■ベトナム■

事務所を移転、七名のスタッフはほとんど新人。総入れ替えに近い形で臨む今年度は、活動の方も初心に返って基礎を固めなおし、ベトナムの急激な開発の波にも流れることのない確実性を追求したい。

チャン・マイン・フン

(ソラ事業コーディネーター)

田舎で育ったので、農民の日々の困難は良く知っています。だから農林大学で社会林業を専攻しました。JVCに入って、自分に役立つことになりうれしい。色白けど山歩きにも強い。

◆ コムラーム (竹筒にもち米を入れて蒸すもの)

グエン・カック・フン

(アシスタントマネージャー)

仕事を通して得た開発の知識と経験が僕の強みです。ソラで活動して、太自然と少数民族の生活にとても惹かれました。雑学情報量では負けない。

◆ タニシ。飲酒力もJVC随一とか。

ダオ・マイン・チュオン

(ボランティア)

大学で農業経済を専攻。JVCに入ってから、支援とは人々が力をつけることをサポートする活動だと知りました。経験を積んでスタッフになりたい。英語を勉強中。

◆ 魚と豆

田村崇史

(事務/事業補佐)

奮起して(？)会社員から再び学生になり、その後ハノイへ留学。そして今春からJVCに加わりました。ベトナムの強い地酒に耐えうるよう「肉体改造」に努めます。

◆ バインミー・チュン(フランスパン卵焼きサンド)

伊能まゆ (プロジェクト・アドバイザー)

ベトナムに関わり始めて六年、ベトナムの人々の「したたかさ」にいつも驚き、感心しています。これを身につければ、何でもうまくいく(？)。私も元気に「したたかに」活動したい。

◆ シン・ト(果物、氷、コンデンスミルクのフルーツミルクシェイク)

西愛子

(代表)

この業界に入ったのは四十一歳(遅すぎた目覚め？)。以来JVC他のスタッフとして、カンボジア、ベトナムで活動。そろそろ日本で暮らしたい。活動の原点は経済効率至上の社会への違和感。

◆ 手作りヨーグルトと手作り豆乳。毎日買う。

ホアン・ティ・レ・ハン

(ホアビン事業 プロジェクト・コーディネーター)

イギリスのNGOでボランティアをしていたころJVCに出会い、地元資源や知恵を用い、自分で決める暮らしを目指して、人々が力をつけることに賛同した。一児の母。夜間の大学院で勉強中。

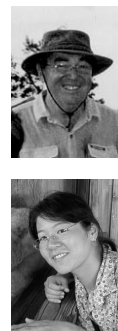
◆ 揚げ春巻き。毎日でも食べられます。



後列：フン(チャン)、フン(グエン)、チュオン、田村
前列：伊能、西、ハン

■南アフリカ■

都市では貧困地区の子どものための教育福祉。農村では環境を保全し、食料の増産をめざす。常に「地元の人々から学ぶ」気持ちで、自分たちができることを考え続けていきたい。



左：津山(上)、ドウドウジレ(下)
右上：ティム 右下：小林



津山直子

(代表)

スウェーデンで南アの人々と出会い、反アパルトヘイト運動へ。九二年からJVCに参加。南アでの草の根活動にどっぷり漬かる人生を送っている。障害児ホーム、スラムの学校、エイズ、シングルマザー、農村出張…、東京事務所から督促も。

◆ ウクシニコサ民族の主食(とうもろこしの粒とインゲン豆を混ぜて炊いたもの)

ドウドウジレ・ンカピンデ

(アドミニストレーター)

JVCの職業訓練の支援を受けて、コンピュータ、会計を高等専門学校で学び、その後JVCへ。今年八年め。会計、事務、「直子の探し物捜索隊」まで幅広くこなす。電話番号を五十以上覚えてる。

◆ ティンツワナ民族のパップーと「もろこし粉を炊いた主食」

ティム・ウィグリー (農業担当・現地専門家)

カラ地区の村々を回る。人間も自然の一部としてその恩恵を受け、自然を守りながら食糧を生産できるよう、農民へ自然農業の研修、アドバイスをしている。村人からの信頼度ナンバーワン。

◆ 野菜炒め。ベジタリアンです。

小林恭恵

(農村開発ボランティア)

会計、報告、村の訪問、ミーティングに参加しています。楽しみは、「こぼやし菜園」の設置。日本から納豆菌を持ってきたので、大豆を育てて、手作り納豆を作りたい。

◆ フリリン料理のピナックベ(ゴーヤ、ナス、豚肉などを魚の調味料で煮たもの)

■アフガニスタン■



本間、谷山

緊急とポスト緊急の活動が終わって、次の活動を目指している。政治情勢は来年の選挙まで目が離せない。支援活動とアドボカシーの二本立てでやっていきたい。

谷山博史

(代表)

十七年間JVCで活動。その総決算をするつもりでアフガニスタンの現場へ。国が壊され、今また造られようとしているこの過程を、しっかり見つけ伝えたい。自分としてもJVCとしても大きなチャレンジだ。

◆ コフタ(アフガン風ハンバーグスープ)

本間一

(プロジェクト調整員)

十七年前、シンポジウムでJVCと協働し、それがきっかけで国際協力の道に。現在、村人との良好な人間関係づくりを模索中。ローカルスタッフが私のコーチ。

◆学校給食、郷に入れば…お陰様で世界中の食に適應できる胃袋に。

モハammad・アフザル (通訳兼アシスタント)
私は薬剤師。ジャラバードではプロの薬剤師が足りないのだった。JVCの農村での医療活動を見て、スタッフが村人に親しく接する態度に感銘を受けた。

◆シヨラッ (唐辛子ベースのチャーハン。お祝いの時に食べる)

モハammad・バハドゥール・バブリ (門番)
政府の仕事もしているが、給料が少ないので自分で何でもする。家も造るし電気工事もある。アフガニスタンには職がない人が多いので、これからは職業訓練が大事だ。

◆ドウツビヤザ (牛肉・玉ねぎのマサラ煮炒め)

サロワール・ファジ (門番)
ナジブラ政権時代に警官や兵士を助め、その後自走車や車のタイヤを修理する店を開いた。アフガニスタンが農産物を自給できるように、農民を支援することが大切だと思う。

◆マントウ (山羊肉のシウマイヨーグルトかけ)

フアリドゥラ (門番)

NGOの門番から始めて色々な団体で働いた。今夏から大学の農学部で勉強し、将来農業復興に関わりたいと思っている。危険を冒して活動するJVCに感謝。

中東

イラクやパレスチナは歴史の負の遺産と、時の国際関係に翻弄され続けてきました。この二カ国には生まれたヨルダンも多く、パレスチナ・イラクの難民を抱えています。苦境に立たされている人たちが、自らの手で平和を切り開けるよう支援していきます。

小林和香子 (パレスチナ調整員)

現在大学院生、休学してJVCに参加しています。その前は十年あまり外資広告代理店で営業・マーケティングを担当。JVCの支援のあり方に共感しています。

◆シヨルマ (中東版ハンバーガー)

石原聡美 (パレスチナ駐在)

パレスチナのNGOでコンピュータ関連のボランティアをしていました。西岸・ガザ各地を回って、現地の人とはもちろん、世界中から来る人と知り合えるのが楽しい。

◆カタイエフ (チーズやナッツを包んでシロップに漬けたパンケーキ。断食月のお菓子)

佐藤真紀 (中東事業代表)
イラク、ヨルダン、パレスチナのコーディネーションを担当。今は緊急対応に追われているが、本来人々が持っている豊かな文化を繋ぎとめていくことが私のテーマ。

◆冷たいビール (中東は乾燥していて、のどがからになるので)



石原、佐藤、吉野

吉野都 (イラク緊急対応/看護師)

パレスチナからバグダッドまで流れながれて早一年です。今年も中東の今を生きる人々の声を、こころの風味(素材を生かした天然の味)でお届けします。

◆御徒町の「かつば寿司」。一時帰国時のいやし。

東京事務所

清水俊弘 (事務局長/JCBL運営委員)

小学校に勤務の後、八七年からJVCに参加。タイの難民キャンプで、カンボジアで、近年は緊急対応の活動を。市民の声を直に聞き、彼らの立場で考え、行動したい。それができるのがJVCだと思っている。

◆パスタ、プリン

壽賀一仁 (総務)

海外を飛び回るビジョン丸も今年はお休み、日本にいる予定です。アフリカやアジアの各地で育まれてきた世界観や自然観を基礎に支援していきたい。

◆ラボコ (雑穀で醸したジンバブエのお酒)

高橋清貴 (調査研究)

ただでさえ「頭」が、下腹と共にますます大きくなりつつあることに危機感を感じる今日この頃、バランスを取るためにも今年は「足」を使うことを心がけます。

◆ラフとカオ・ニヤオ (もち米ほど完璧な組み合わせはない!)



後列：清水、壽賀、高橋
前列：金、熊岡、広瀬、磯田

金敬熙 (調査研究)

JVCを通じて、人道主義、人道NGOの役割を学んできました。JVCは人道支援のフロントライン。多文化共生・マイノリティの視点から平和を考えたい。

◆焼酎 (昨年はギネスビールだった。だんだんオヤジ化?)

熊岡路矢 (代表理事)

自動車整備、技術翻訳の仕事からJVCへ。JVCでは、タイの難民キャンプ、カンボジア、ベトナムでの活動を立ち上げました。紛争地域での人道援助や、現場発平和への唱道にも参加しています。

最近、講演、報告会の活動が増えました。今後他の活動にもシフトしていくつもりなので、これまでの体験を、自分のために、また次世代に伝えるために、整理していきたい。

◆タイのトム・ヤム・クン (えび入り酸辛スープ。衝撃的な出会いだった)

広瀬哲子 (カレンダー事務局)

広告会社に五年間、その後、海外青年協力隊でモンゴルへ行き、映像制作の指導を。JVCでは、一般の方にも興味を持ってもらえるようきつかけづくりをしたい。

◆ホッケと日本酒 (辛口系)

磯田厚子 (副代表/プロジェクトサポート委員)

プロジェクトの運営や評価へのアドバイザーなど、活動をサポートしています。昨年六月から外務省の「ODA総合戦略会議」の委員に。皆さんの声が政策を変える力になります。HPの調査研究ページを覗いてください。

◆ラオスのケーン・ノーマイ (青菜・竹の子汁)

倉川秀明 (タイ事業)

パプアニューギニアに二年間いて、自然とともに生きる人々の暮らしに魅了されました。地域循環のシステムをどう作り出す



後列：倉川、塚本
前列：寺西、越智、原田



後列：鈴木、小林（中東を参照）、蜂須賀、上住
前列：谷山（アフガニスタンを参照）、田村、鹿住

（中東事業）
田村 祐子
戦争と平和。中東地域での活動は大変ですが、多くの人の出会いがありま。現地スタッフをどうサポートするか、模索の日々。

原田 恭子（南アフリカ事業）
新米の私にとって、毎日は怒涛のように

越智 美奈（ベトナム事業／ラオス事業）
JVCで活動してまもなく四年。今年からベトナム事業とラオス事業の兼務になるので、気分一新で楽しみたいと思います。
◆ 瀬戸内の魚、いりごだし＆麦味噌のお味噌汁。

寺西 澄子（コリア事業）
夜の地球を、宇宙から撮影した写真を見た。日本列島も日本海も（魚船の明かり？）昼のような明るさなのに、朝鮮半島の北半分だけ暗い。反対に、北朝鮮で見上げた夜空は星がまぶしかった。忘れられない。
◆ 担々麵。近所の店のは甘めで好き。

塚本 和泉（前ラオス事業）
ボランティアで三年、スタッフで八年JVCで活動してきましたが、この四月に退職。ベトナムに「主夫」として住むことになりました。かあちゃんもJVCスタッフです。
◆ さばの煮付け

か、タイと日本の経験を繋げていきたい。
◆ 赤アリの卵と赤アリの炒め物

上住 純子（アフガニスタン緊急対応／看護師）
村への巡回診療をしながら、徐々に活気を取り戻すアフガンを肌で感じました。主体的に行動し、全員が話し合っで決めるというJVCの方針は「目からうろこ」。
◆ タルバートタルカリアチャール（豆のカレー、野菜のおかず…ネパール定食）

蜂須賀 真由美（アフガニスタン事業）
東ティモール滞在中、インドネシア軍事占領下で人々がどんなに酷い目にあったかを聞き、「家族とともに安心して暮らせる」ことがどれほど尊いものか実感しました。
◆ 炊き立てのご飯（飽きない！）

鈴木 まり（カンボジア事業）
カンボジアでも「より早く、より多く、より楽に」という近代主義が紹介されつつある。流されず、必要なことだけ選択している村の人々から学ぶことは多い。
◆ おいしいもの。山の頂上で食べるお昼ご飯。

過ぎてゆく。「初心忘れれるべからず」、底冷えする事務所までひざ掛けして、ほかほか陽気の南アフリカを思い浮かべる毎日です。
◆ チョコレート

細野 純也（会報誌レイアウト／システム管理）
SEとして米国出張した時に九・一一が発生。その理不尽さ・不可解さを考えているうちに、JVCにたどり着く。他スタッフとは異なる守備範囲をどう生かすか鋭意考慮中。
◆ 煮詰めるスープの類（ピーフシチュー、けんちん汁など）。自分で作っても失敗しないね。

石川 朋子（広報／JVCコンサート事務局）
国際協力コンサートの事務局として怒涛の一年。得たものは、皆の力で一つのものを作り上げる達成感と、感謝の気持ち。今年は「きちんと計画実施系」を目指します。
◆ きのこと、海草、野菜、豆腐…最近では低カロリー系に路線変更。肥満防止!!

荻野 洋子（広報）
銀行の外訪営業、健康食品の広告ツールなど「売れてナンボ」の世界からJVCへ。「そんなヤツが一人くらいいてもいいじゃん」と早十年、最長記録です。
◆ 白子、うに、ドリアン、羊の脳カレー

中山 郁子（会員／開発教育）
子どもたちの聡明さにはしばしば舌を巻きます。戦争の話をしたとき「戦争は人が死ぬしお金はなくなるし、なんにもいいことないじゃん」と言われ、そつだよね…。
◆ 魚沼のコシヒカリに紀州の梅干。最後の晚餐と決めています。

鹿住 正人（前ベトナムホアビン住民参加型農村開発）
飲んで食って、ベトナムで10kg痩せました。
◆ チキンサラン（ひやひやのチキンカレー）

今年はアラビア語挑戦するか？
◆ ヨーグルトと蜂蜜には目がありません。



後列：中山、荻野、石川、細野
前列：富安、バスカビル、岩間、川合

川合 千穂（前カレンダール事務局）
カレンダール担当を三年勤めて今度ラオスへ行きます。ラオスからの報告を楽しみにしていただきます。あー、アルプスと（ツライ）しばしの別れじゃー！
◆ グレープフルーツゼリー

岩間 邦夫（経理／労務）
知人から「お前が経理でJVCは大丈夫か」との声しきり。一応、米国公認会計士試験合格してるんです。勉強した内容は忘れてしまいましたが、決算に向けて戦々恐々の日々。
◆ 故郷・旭川市にある蜂屋のラーメン

アイネス・バスカビル（理事／JVCコンサート実行委員長）
八六年からJVCベネフィットコンサートを続けて、十五年。今年は、不景気に負けず、コンサートを通して、一千万の収益をあげ、JVCの活動を広く伝えたい。
◆ 特になし↓なんでも好き。

す。あんな現実を、今体験している人たちがいる。戦争はいやです。
◆ 何でも食べます。雑食なので。（だから若い！）

「タイ・ノンジョク自然農園」プロジェクト終了――

自然農業と自給自足を求めて

東京事務所・タイ事業担当 倉川 秀明

一九九八年二月にタイで始まった「ノンジョク自然農園プロジェクト」は五年を経て、今年三月をもって終了した。現在この農園は独立して、現地のNGOや農民たちから自然農業が学べる貴重な場として注目されている。終了にあたって、今年一月に関係者が農園で終了評価を行ない、これまでの成果、問題点、今後のあり方などを話し合った。※注一

ノンジョク自然農園、三つの目的

高層ビルが林立するバンコク中心部から一時間半ほど車で行くと、バンコク郊外とは思えない田園風景が広がってくる。ゆつたりと流れる運河のほとりでは魚を釣ったり、洗濯をしている

人がある。ノンジョク自然農園はバンコクの北東約五十キロの農村地域にあり、農園の周囲はこんもりと様々な木々に囲まれ、畑の野菜のみずみずしい緑がまぶしい。たまたま稲刈り体験に来た子どもたちの歓声が田んぼに響く。

農園の広さは四ヘクタール、そのうち水田

（有機農産物の流通を担う、パンラック（シユタイナー）教育を実践している幼稚園）との四団体で運営されてきた。農園の目的は以下の三つである。

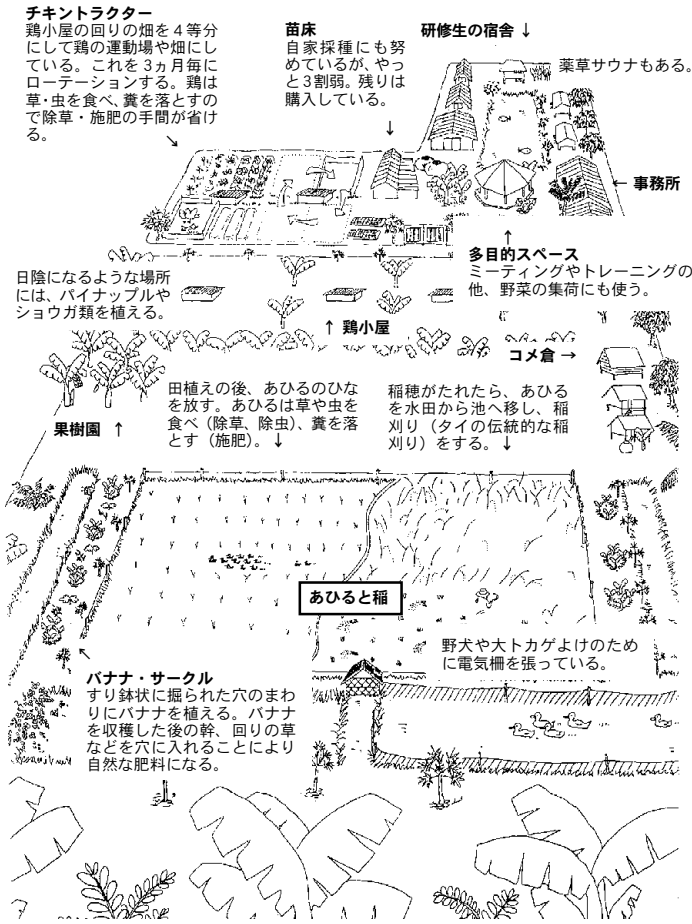
- ① 自然農業のコンセプトと、農民が実践できるような自然農業の適正な技術のモデルを示す。
- ② NGOのスタッフや農民たちに自然農業を学ぶ機会を提供する。
- ③ 農場で生産される自然・有機農産物を、消費者との顔の見える関係を通して販売し、経済的に自立できる農園経営を確立する。※注一

農園の経済的な自立も達成

最終評価においては、プロジェクトの当初の目的が達成されており、今後は農園として自立していけること、また、JVCは引き続きこの農園をタイにおける活動の拠点の一つとして関わっていくということが確認されたので、JVCのプロジェクトとしては二〇〇二年度末をもって終了するという結論となった。

この農園の手法は、農園の中のある資源（農作物、鶏糞、果樹や草、水など）を循環させることだ。捨てるものはない。野菜や果物、ハーブや樹木などの種類・品種を多くして自然の森に近づけることで一年中多様な作物が供給でき、同時に、虫の被害や病気がなくなる。今後は手間のかかる野菜づくりだけにこだわらず、果樹を増やすこと、魚を近くの市場で販売すること、コメづくりにも今まで以上に時間をかけ、増収をはかることなどを計画している。

ノンジョク自然農園の全体像



※注一 農園の詳しい紹介は本誌二〇〇一年十二月号（通巻二〇五号）を参照のこと。
※注二 日本の有機農業における「提携や、アメリカのCSA (Community Supported Agriculture) のような関係。CSAとは、コミュニティを支え、かつ支えられる農業という意味。ノンジョク自然農園では消費者が一年分の会費を前払いし、農園が野菜、卵、果物などを週一回消費者に届ける。

二つ目の目的である研修・トレーニングの提供では、長期・短期トレーニングを実施し、多くの訪問者・見学者を受け入れてきた。地元行政官など農園にコンタクトしてくる人も少しずつ増えている。今後は短期研修プログラムを設定するなど、今まで以上に広報する考えだ。

経済的な自立については、農作物の収益だけでスタッフの給料を含む経費の九〇%を賄えるまでになった。そこで、農園部門とトレーニングセンターの会計を分け、スタッフの給料の二五%をトレーニングセンターから支出することとした。スタッフがトレーニングにもかなりの労力をかけているからだ。このことによって、現時点で農園全体の収支が取れているという状態となり、経済的自立の達成が確認された。通常、モデル農園というのは母体の団体から資金を投入しつづけないと運営できないのだが、農園自体の収益だけで経済的に自立できるということは画期的である。

ノンジョク自然農園の意義

このプロジェクトが計画された当初（一九九

答えを生きる

村上 真平(元ノンジョク農園代表、
現農業共同体チャルカ主宰)

私たちが真摯に向き合うべき課題は、「生命の基である自然を収奪しない生き方」と「他の人、特に弱い立場におかれている人々を搾取しない生き方」でしょう。そのための提言、啓蒙も大切ですが、一番大事なことはその解決になる答えを生きることです。ノンジョク自然農園に集う人々は、日々「答えを生きる」ことに真摯です。その生き様が続く限り「多くの働き」がなされます。

七年、JVCタイは、それまで行なってきた農村開発プロジェクトを終了させて、大きな転機を迎えていた。また、その頃のタイは、周辺諸国に比べて国民所得が向上し、外からの「援助」は必要ないとみなされ、撤退する海外NGOも多くみられる時期でもあった。

しかし、実際には都市と農村の所得格差、自然資源の破壊、借金の顕著化など、国家主導の開発の陰で深刻な問題が起こっていた。JVCはそれらの問題に取り組むことの重要性を感じ、活動を継続することを決意、その切り口の一つとしてこのプロジェクトを始めた。

自然農業や有機農業の普及活動をしているタイのNGOは、それらの農業の適切な技術と経済性の具体的な提示が不十分であり、農民やNGOスタッフが研修できる場も少ないという課題を抱えていた。その必要性に答える場としてノンジョク自然農園を立ち上げた。海外のNGOであるJVCがタイに関わる意義もそこにあった。

この農園が当初のプロジェクト目的を達成して、農園として独立できたことは、当初の責任者であった村上真平氏の創意と工夫が大きかったとともに、農園スタッフの日々の弛まぬ努力と意志の強靱さがあったからこそである。農園の現責任者ディサットさんは「自分がここで働いているのは、自分の理想の生活ができるから。自分たちが楽しんで生活していることが大切であり、そういう気持ちこそ持続的だ。今までの人生でこんなに働いたことはなかったが、その分返ってくるものがある」と語っている。

JVCの今後の関わり方

今後JVCは、農園のアドバイザー・コミティーのメンバーとなるが、立場が変わって

も、今まで通りJVCの事務所を農園内に構え、次のような関わりをもつこととなった。

① JVCのネットワークを生かし、若い人たちに農園の活動への参加を呼びかける。

② JVCは、日本の農民など、経験や知識を持つ人たちとの経験交流を促進することで、農園をサポートしていく。

③ 日本人の人材育成の場として、プロジェクトの一つ「タイの農村で学ぶインターンシップ」での派遣前研修やスタディーツアーに活用していく。

④ JVCの活動地域の村人及び関係者が自然農業を学べる場として、農園を積極的に活用する。

⑤ 農村開発に関わるJVCスタッフ自身の研修の場として生かす。

⑥ 農民奨学金制度（農業を学ぶ意志があっても研修に参加できない農民に一年間奨学金を支給する）をサポートする。人材育成の重要性に鑑み、この制度に関してのみ、JVCは間接的に資金的なサポートを行なう。年三人から四人程度の見通しである。

森のように木々や草が茂る農園に佇んでいると、何もなかった重粘土の埋立地から農園を立ち上げたということがまるで昔話のように思えてくる。マンゴーの木の枝にぶら下がる赤アリの巣を眺めて、これも生態系の中で一つの役割を担っているとともに人間の食材の一つだとも思うと、豊かさとはこんなところにも現れているのだと実感する。自給するということが、生活の最低ラインを表すのではなく、外部の何にも左右されない積極的な生き方を提示することだという農園の考え方に共感を覚えずにいられない。

（くらかわ ひであき）

※ビル・モリソン

1928年オーストラリアのタスマニア生まれ。パーマカルチャー（持続可能な環境を作るデザイン体系の意）の提唱者。目指すものは自然農業の理念に近い。共著書「パーマカルチャー」（農文協）など。

ノンジョクで働いて

◆自分自身を触発しつづける それが農園の仕事

ディサタット・ロヤナラック（農園代表）

自然農業を実践するということは自分自身の姿勢を変えることだ。たとえその原理をよく理解したとしても、実現することははるかに難しい。それが、私がノンジョク自然農園で学んだことである。

五年間私たちが一生懸命に働いた結果、農園の土壌の豊かさや生態系のバランスも回復した。それでもなお、やるべきこと、磨くべき技術はたくさんある。例えば、カモとコメの同時作では持続性と生産性を実現するために、さらに多くの時間と手間をかける必要がある。同時に、この回復というのは「自然」の働きによるものであることを忘れてはならない。私たちは単にその過程における推進役に過ぎないのだ。

最大のプレッシャーはいつも農園の財政事情から来る。プロジェクトを最小の支援金の範囲内で行なうということは重要なことではあるが、それは仕事の中でも最も楽しさの少ない部分である。そのプレッシャーをなくすために、農園の経済的な面を単なるバランスシートとして見ないように努めている。

自給自足というものが、それよりもっとよいアプローチであると信じている。プララー（発酵させた魚とスパイスとハーブのソース）を作るために魚をもつと養殖したいと思う。砂糖を自分たちで作ることをまじめに考えている。これらの計画は必ずしも劇的には支出を減らし、収入を増やすことにはならないかもしれないが、これらのことから自己発見という感覚が生まれ、お金がなくても自然によって私たちがやっていけるという自信ができる。

トレーニングを提供することは私たちの仕事の一部であるが、私たちの仕事は他の人々を訓練することであるとは考えていない。もし誰かが農園に来て自然農業に触発されたなら、私たちは嬉しく思うが、誰かを触発するよう仕組むことはできない。私たちがすることは私たちが自身を触発しつづけることであり、それこそが最も大切な仕事なのである。



▲ため池、研修棟、スタッフの家など、木々と草が生い茂るノンジョク自然農園（2003/1撮影）

◆自然農業を確信して

ソンバット・チュムナム（農園スタッフ）

僕がこれまでの人生でやってきたことは農業以外にない。それはそうだ。僕は農民の家に生まれ、育ったのだから。大学でも僕は「農業」を専攻した。その頃は「自然農業」のことなんて教えてくれる人はひとりもいなかった。卒業後、このノンジョク自然農園で働く機会を得た

のだが、最初の頃は農薬も化学肥料も使わないで農業ができるのかと半信半疑だった。ただ、この農園で目指そうとしていることは、とても大切なことなのではないか、という漠然とした確信があった。その時はそれが何であるかはつきりとはわからなかったのだが、これはやってみるしかない、と思ったのだ。

僕はこの農園に来て五年になる。今は「自然農業」を心底信じている。農薬や化学肥料を使う近代農業は、長い間農民を苦しめ続け、決してよい状況にすることはなかったのだ。

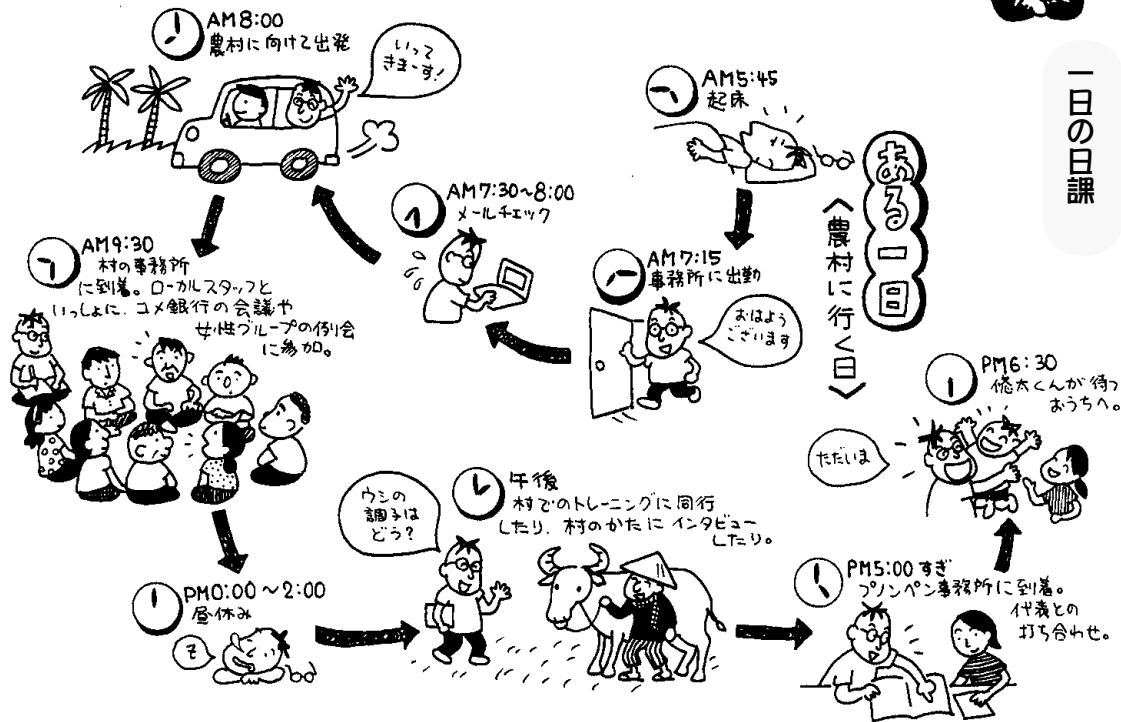
僕は五年間この活動に携わってきたが、僕の目標は野菜やコメや卵の生産をあげることではない。農民に、彼らにとって最もよい農業のあり方を理解するチャンスを与えることなのだ。

◆自分の生活を自分で創りだす

皆見陽子（農園スタッフ）

まだJVCスタッフであった頃、「自分が育った村ではみんなが必要なのは何でもつくり、いくつものことをして暮らしていた。およそ仕事と呼ぶべきものを持っていない人はいなかった」とビル・モリソンが書いたその状態はある種の理想郷だと理解していた。農園スタッフになって初めて理解したのは、身体を動かすということがいかに精神に大きな創造力を与えるか、ということである。

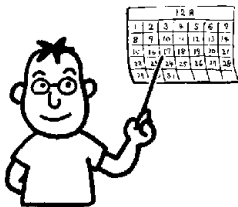
朝から夕刻までコツコツと身体を動かすことはいわゆる「仕事」の範疇には収まらないものがある。MH・ガンジーが糸紡ぎにこだわったのは、ただ糸の生産が象徴的であるからではない、そこには自分の心を安定させる肉体労働があるからだ。自分の生活に関わるということを根本から見つめ直させてくれる。農に関わって、ようやく私は自分の生活を「購入する」のではなく、自分で創りだすことを知った。



現地で、スタッフは毎日どのように活動しているのですか？ 具体的に教えてください。

その国、担当している活動によってまちまちですが、今回は、カンボジアで農村開発活動をしている余部さんの一日の目録と一カ月の活動記録をご紹介します。

余部さんのカンボジア活動日記



*答えた人：カンボジア事務所・余部 徹

99年3月からカンボジアで活動。洋子さんと悠太くん（2歳）の3人家族。事務所から5分、大家さんの家の2階を借りて住んでいます。楽しみは食べること。ちなみにカンボジアへ来て10kg増量しました。

1カ月の活動（2002年12月）

*JICA：国際協力事業団。日本政府の援助を実施する機関。

- 11月26日 JICA*専門家と青年海外協力隊のスタッフが訪問。JVCの活動を説明
- 11月28日 稲作のトレーニングに参加。農家の人と水田を見て回る
- 11月29日 「農村開発」の月例ミーティング
- 12月2日 事務所の月例会議
- 12月4日 支援グループの担当者の方を農村に案内
家庭菜園トレーニングを見てもらう
- 12月6日 このころ、他団体の農業被害ワークショップの準備に協力
- 12月9日 養魚トレーニングに参加
- 12月16日 この週、教材作成用のために情報収集。資料センターの模様替え
- 12月24日 コメ銀行の返済を話し合う会議に参加
女性の相互扶助グループの例会にも参加
- 12月26日 神奈川県教職員組合の方々にJVCの農村活動を説明
- 12月30日 「資料センター活動」のミーティング
- 1月3日 「農村開発」の昨年の振り返って話し合い



村へ行って、村人のミーティングやトレーニングに参加したり、活動のようすをみたり。事務所では活動分野ごとにミーティングがあるようです。他、支援者や関係者の訪問受け入れも多いですね。



ビエンチャン／^{なむら まさよ}名村 雅代

「え、ラオスに家族3人で？ いいですね、ラオスは桃源郷みたいなところですからねえ」

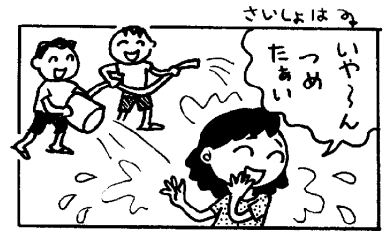
桃源郷——そんな美しい讃辞を贈るのは、もちろんラオス・フリークのしりあいである。夫のJVCラオス・タケク事務所赴任を前に、彼はそう言った。しかし桃源郷の現実は一筋縄ではいかない。暑さと虫が苦手な私には、ここは暑さと虫だけの国にさえ思える。

とはいうものの、ラオスは治安も良く、人がおっとりして優しく信心深く、笑顔がすばらしい、という評判に嘘はないと思う。そんな穏やかな国で、猛暑の4月半ば、はじめての水かけ祭り（ラオス正月）を迎え

※今回は趣向を変え、「スタッフの連れ合いのひとりごと」をお送りします。ラオス・ビエンチャンの名村隆行さんのお連れ合いです。（編集部）

た。我が家の前でも近所の子もたちが集まってホースや桶、水鉄砲を手し、道行くバイクや自転車をねらう。とりわけ高校生くらいの男女が水をかけ合う笑顔のまぶしいこと。マツリとは配偶者選びの重要な機会でもある、という文化人類学的考察が頭をよぎる。ギャングたちは最初は一致団結して通行人を攻撃していたものの、次第に内ゲバ化し、仲間内で本気になって頭からざぶざぶやりあって、通行人なんかそっちのけになっているのがおかしい。この行事は子どもや若者の楽しみなんだな、と納得。

しかしその認識はまちがいだ。夕方、夫の同僚のラオス人に招かれて家を訪ねた。すでにテラスは水浸し、ビール瓶が散乱し、ステレオからは大爆音、飲めや歌えの大騒



イラスト／かじの 倫子

ぎ。30人はいるだろうか、下は2歳の子どもから、上は白髪のおばあちゃんまで、全身濡れネズミで腹がよじれるほど笑い合っている。私たちもはじめは遠慮がちだったが、いつしか夫は小さな子どもの背中にまでホースをつっこんでいた。この光景、プロ野球の優勝チームのビールかけそっくりだ。ビールじゃなくても充分ハイになれる。狂乱の桃源郷であった。

日朝交渉 課題と展望

姜尚中 編
水野直樹 編
李鍾元 編



緊急出版

停滞させてはならない、
平和と共存への道。

『日朝交渉』

姜尚中／水野直樹／李鍾元 編
岩波書店刊 1700円＋税

（調査研究・政策提言担当／
金敬默）

NGOの立場から、JVCの熊岡路矢代表も「北朝鮮の食糧問題と人道援助のあり方」と題する一文を寄せています。ぜひお手にとってみてください。

このメッセージを読めば、私が、改めて本書の目的を補足する必要はないでしょう。日朝首脳会談の目的は、不正常な関

書は一種の「癒し」であるかも知れません。タイトルとは裏腹に、とてもマイルドな一冊でした。

「拉致と核開発問題が日本社会を震撼させている。はたして北朝鮮はどこに向かうのか。アメリカの強攻策に追随しては、北東アジアに平和と安定は訪れない。北朝鮮内部の事情、日本の植民地責任、在日コリアン社会のゆくえを含め、山積する課題をめぐって、この地域を不戦共同体にすることを目指して、日朝の不正常な関係にピリオドを打つべく、二〇余名の識者が冷静に訴える行動の指針」

みるよあきく

これら疑問に対して、本書は、日本、韓国、世界の視点から日朝関係の現状の課題を冷静に分析しています。そして、平和と共存というキーワードのもとに、私たちが進むべき方向性を示しているのです。力の論理ではなく、対話を重視し、文化を尊重する。そのとき初めて、お互いの「傷」が見えてくるはずです。冷静さが欠けている今の日本に、本書は一種の「癒し」であるかも知れません。タイトルとは裏腹に、とてもマイルドな一冊でした。

本書の帯に書かれたメッセージです。日本における緊迫した情勢がしみじみと伝わってくるような見出しです。さらに、表紙をめくると、次のようなメッセージが私の目に飛び込んできました。

関係の正常化でありました。しかし、現在の流れは、不正常な関係の恒久化であるかのようにみえます。この逆行の流れに対して、本書の執筆者たちは、冷静な分析と経験からロードマップを提示しています。その点、本書は非常に「贅沢」な一冊ともいえるでしょう。

日本社会に「北朝鮮の変化」に着目する人は何人いるでしょうか。何故、日本の世論はこれほど悪化したのでしょうか。何故、政府は国益だけを優先するのでしょうか。そもそも、国益って何なのか。のでしょうか。

停滞させてはならない、平和と共存への道——。

タイ

木村 茂

新プロジェクト調査 北タイの多様性を保つために

J VCタイのチエンマイ

事務所は、新しいプロジェクト開始の可能性を探るために、昨年七月に新しく開設されたものです。[Institute for Sustainable Agriculture Community]というタイのNGOの事務所内に間借りしており、常勤一人と非常勤二人の計三人のスタッフで、活動の可否を判断するための調査を行なっています。

チエンマイ県をはじめとする北タイでも、近年では化学肥料や農薬を大量に使用した単一作物栽培が盛んです。しかし、現金収入を得るためのこうした農業は国際価格に左右されやすく、農民の多くが借金を抱え、最後には土地を売り渡して労働者になったり、都会に流出していく契機になるケースが少なくありません。農業による住民の健康被害も深刻です。企業による土地の買占めもしばしば行なわれ、土や水、森といった環境破壊が急速に進んでいます。

自然と暮らしが有機的に結びついた持続的な農業とは、いつてみれば近代化の波が押

し寄せる以前のつい最近までどこでもふつうに行なわれていたものです。

近代化による科学技術の普及は、乳幼児の死亡率低下をはじめとして、人の暮らしをより豊かで安定したものにするのに大きく寄与した一方で、経済に著しく偏った価値観を蔓延させ、「カネ＝豊かさ」という単一の価値観が世界を席巻しようとしています。

北タイ地方は大半が山岳地域で、また同時にたくさんの民族が共生してきた、文化的にも生態的にもきわめて多様な地域です。ここでは一部の村人たちが手を取り合い、智慧を出し合って、地域の多様性を保全していこうとし始めている。

JVCは国際NGOとしてこういった住民の活動に協力ができないか、スタッフは毎日、村を訪れては人々に学んでいるところです。

(チエンマイ事務所)



◀菅原文太に似てる(?)クオン村のプランカトレン村長(中央)
(カンボジア)

※セサン川のヤリ滝ダムはベトナム側に1993年からロシア、ウクライナ他、外国からの支援を得て建設された。2002年にはセサン3ダムの建設が始まっている。

カンボジア

米倉 雪子

「開発」の脅威 川水を飲んだ水牛が死んだ

四 月半ば、カンボジア北

東部のラタナキリを訪れた。ラタナキリでは、NTFP(非木材林産物)というNGOが、先住民と共に共同体の林、森から採れる様々な動物や植物など「非木材林産物」を守る活動をしている。JVCも、その設立や活動に協力してきた。

最初に訪れたのは、クオンサイ郡のクオン村。独自の言葉と文化をもつクルン民族の村だ。彼らは、カンボジア政府から一九九八年に木材伐採権を得たヘロー台湾社による森林伐採に脅かされた。村長のプランカトレンさんや村人の話では、ヘロー社が木を切り始めた時、近隣の五つの村が抗議によって伐採を止めることができたという。この村の人々も伐採に抗議、ヘロー社は引き上げた。

村を流れるセサン川の汚染も問題になっている。村長によると「ベトナム側にダムがつくられてから、川は全く変わってしまった。いつ水がダムから放水されるかわからず、川岸に舟を置いておけなく

なった。水を飲んだ水牛・豚・鶏などが死ぬという被害も出た。コレラも発生した。今も、人々が水浴びをすると肌に湿疹が出る」という。「ベトナムのダムの持ち主に、昔の川に戻してくれるように話してくれないだろうか」と頼まれた。次の日に訪れたロンバット郡のパタン村も森林伐採に脅かされていた。この村には、別の言葉と文化をもつタンプア

ン民族が住む。村のリーダーの一人のセンセインさんと話した。「伐採で野生動物が減ってしまった。森がなくなったら暮らしていけない。伐採しているのは集合村長とそのスタッフだ。彼らは違法なのに、大きな木を切って売ったがっている」という。村を後にしてしばらくすると、道沿いには、森を伐採したばかりの風景が延々と続いた。カシューナツツ農園にするためだという。

自然と共に生きてきた人々の暮らしが今も脅かされている。監視と提言活動が必要だと、決意を新たに旅した。

(カンボジア事務所代表)

場から～

四

月上旬、農村開発を行なっているホアビン省タンラック郡で、郡の職員などを対象に、開発に際しての住民参加の重要性とプロジェクト・マネジメントを改めて学んでもらうため、「住民参加型コミュニケーション開発」の研修を実施した。

研修は開発プロジェクトの概念から始まり、参加達成度の各段階、ジェンダー・イシュー(社会的性差別)、グループ討論の進め方まで、ローカルNGOの経験豊富なベトナム講師が、語りかけるように説明を加えていく。

時には、歌が大好きなベトナム人らしく「参加型の歌(うた)を皆で唄い、参加の意味を体感させるグループ対抗の工作コンテストなど、受講者を飽きさせない工夫が随所に見られた。また、物質主義ではなく人間開発の重要性や地域の伝統文化を尊重することなども盛り込まれていた。

社会主義国であるベトナムでは、一般の住民が自由にものを言うのは難しく、また、外国のNGOもあくまで政府の

管理下にある。さらに、政府の開発計画により重点的に経済・社会インフラ整備に援助資金が流入している現状がある。

だからこそ、NGOが、JVCが、ここで活動する意義があり、草の根の声を広く社会へ反映させていく住民参加型のアプローチが大切なのである。

しかし、それを実践していくことはなかなか難しい。ましてや数日間の研修で成果がすぐに現れるものでもない。講師からも「だから、ゆっくり、少しずつ」と受講者へ問いかけ、皆、声をそろえて「そう、少しずつ、少しずつ!」。

草の根から地域を変えていくような社会に、ゆっくり、少しずつ近づいていくことを願う。一方で、「参加型」を標榜するJVCのプロジェクトが、住民の自立性、活動の持続性に寄与するものであるのか否か、常に自問自答していく必要があると再認識した研修であった。(ハノイ事務所)

ベトナム

田村 崇史^{たかし}

ゆっくり、少しずつ「参加型」開発を

プロジェクトの ～現状～



▲保育器の掃除を手伝う吉野看護師(中央)。
赤新月社の母子保健病院にて(イラク)

イ

ラクでは、三月二十日に始まった米英軍などによる軍事攻撃によって、国連や赤十字・赤新月社、NGOなどによる活動が停止してしまつたが、四月十六日、JVCスタッフの佐藤調整員と吉野看護師がいちちはやくバグダッド入りし、人道支援の再開と戦争被害の調査を始めることができた。

市内の多くの病院は、爆撃やその後の略奪行為によって機能できない状態にあつた。かろうじて機能していた病院には負傷者が殺到し、医薬品も絶対的に欠乏する中で現地の医療関係者が奮闘していた。JVCはフランス、ドイツのNGOと協力し、旧サダム・シ

ティなどの地域のクリニックに、医薬品や医療物資、浄水キットを届けることができた。JVCが以前から支援しているバグダッドの母子保健病院は三月三十日に爆撃による被害を受けた。吉野看護師も病院再開の準備を手伝い、四月二十日には検診が再開、二月十二日にはお産の分娩も無事

再開された。

三月から始めた食糧支援に関しては、協力しているフランスNGOの現地スタッフとやつと連絡がとれ、モスクや教会を通じた食糧配給について確認することができた。

一方、旧サダム・シティにあるストリートチルドレンの保護施設では、支援した食糧などが略奪され、建物も一部破壊された。日本の子どもからの絵はがきを展示した画廊でも、戦争による破壊に加え略奪がひどく、訪問した学校や児童施設も同様の被害を受けている。

佐藤調整員と吉野看護師は、非戦キャンペーンのポスターに登場する自画像を描いてくれたスハッドちゃん(十歳)に再会することができた。米軍の占領下においても、人々は普段の市民生活を取り戻そうと、ボランティアで働き始めているようだ。JVCはそんな人々の努力をサポートしていく予定だ。

(東京事務所・中東担当)

イラク

田村 祐子

4/16、スタッフ二名がバグダッド入り
人道支援(医療)を再開

会員登場

〜リレーエッセイ22〜

バンコクの日本人主婦パワ―

(タイ) ティラー悦子

バンコク主婦ボランティアグループは、バンコクに住む日本人駐在員の家族が中心となってクロントイ・スラムの子どもたちに工作指導などを行なっているグループです。

私がこのグループに参加して三年が過ぎました。昨年四月からはJVCタイチームのホームページに活動を毎月紹介しています。すでに十年近く活動している主婦の方もいらっしゃると思いますが、二、三年で本帰国となるメンバーも多く、また昨今はボランティアに興味を示してくださる方も少なくなり、メンバー獲得に四苦八苦しています。

私が参加し始めた頃に比べるとメンバーも半数になってしまいました。月に一度のクロントイ住民図書館訪問では顔なじみの子どもたちも多くなり、タイ語がペラペラのメンバーの手を借りながら何とか子どもたちに楽しんでもらおうと、試行錯誤しています。年に一度タイ国日本人会バザーでの売上と、私たちのグループが独自で行なう

ミニバザーの売上から、僅かながらも毎年JVCタイオフィスを通してクロントイ住民図書館に寄付ができることは、メンバーの皆さんが時間と労力を提供してくださった結果です。

メンバー歴の長い方によれば、以前はどんな簡単な工作でも子どもたちは喜んで集まってくれたということですが、最近はゲーム、ビデオ、漫画本などが簡単に手に入るようになり、近くに大きなショッピングモールなどもあるため、そちらの方へ興味が移行してしまうこともあるようです。

スラムといえども殆どの子どもたちがきちんと学校へ行っています。中には親が近隣諸国から違法に入国し働いているため、戸籍のないものがない学校へ行けない子もいるようです。

日本へ帰国されたメンバーの中には引き続きJVCの東京事務所でお手伝いをしていられる方もいらっしゃる、関係が続いていることを嬉しく感じています。



ひろば JVC IN E T W O R K

アフガニスタンに平和はいつ?

アフガニスタン帰国報告会

四月二日に文京シビックセンターにて、一時帰国したアフガニスタン現地スタッフによる活動報告会が行われました。前半は現地代表の谷山博史さんから治安問題を中心に、後半は看護師の上住純子さんから巡回診療活動や人々の暮らしについてスライドを交えた報告がありました。

最近ほとんど報道されないアフガニスタンには平和が訪れたのでしょうか? むしろますます治安は悪くなっているようです。

その背景として、①政府の影響が及ばない地域での、軍閥の割拠・対立・抗争の深刻化、②「対テロ戦争」を目的に駐留し続ける米軍に対する住民の反発、③米英軍によるイラク攻



▲会場からの質問に答える谷山 (右)

撃が引き起こした反米・反政府勢力のテロ活動、④麻薬撲滅政策(けし栽培禁止)への住民の反発などが挙げられました。

果たしてアフガニスタンの復興は成功したと言えるでしょうか? カルザイ政権はいわば暴力によって強制的に作り出された政権です。その政権が平和を築いていく事は可能なのでしょうか?

政治や治安がどのような状況にあると、人々はそこの生活を日々営んでいます。ブルカをかぶった女性はおとなしいようなイメージがありますが、案外パワフルのようです。どこの国も同じですね。

(会員・目黒絵美)

アフガニスタン
ボランティア
チームが始動!!

去る五月九日に、記念すべき第一回目のアフガニスタン・ボランティアチームを開催しました。今後、アフガニスタンのことをもっと知りたい、という人々と一緒に、月一回をめどに集まる予定です。ぜひご参加ください。

《お問い合わせ》

アフガニスタン事業担当・

蜂須賀 真由実

(E-mail: machi@paapc.org)

新スタッフ紹介

広瀬 哲子（ひろせのりこ）

東京事務所／カレンダー担当



はじめまして！四月一日からJVCスタッフ仲間入りしました。

した。これまでは広告制作会社で約五年、ビール会社や自動車メーカーなど様々な企業の広告づくりに携わってきました。その後青年海外協力隊でモンゴルへ。二年間、映像制作の仕事をしてきました。マイナス三十度の冬はさすがに寒かった！まっつも牛乳も凍ります。バナナで釘も打てましたよ。

★動物に例えると・フクロウ。夜行性です。夜歩き、夜遊び好きです。上野のデパートな飲み屋街を極めたいです。

伊能 まゆ（いのう まゆ）

ハノイ事務所／プロジェクト・アドバイザー



ベトナムに長期滞在するように、なつてから、日本の文化や自然の素晴らしさ、そして抱

える問題点が理解できるようになりました。他文化の中に身を置くことによって、初めて、自分が育った日本という国を客観的に見られるようになった気がします。これからまた、ベトナムという他文化の中にどっぷり浸かって活動を行いますが、ベトナムと日本の素晴らしい点をたくさん発見していきたいと思っています。

★動物に例えると・寅年なので、トラかな…すぐに吠える：噛みつく…!!

全日本自治団体労働組合（自治労）よりご支援

《南アフリカプロジェクト》

中央本部から南アフリカのテボホ障害児ホーム支援事業へ四十万円のご支援をいただきましたが、それに加えて、東京都本部がメーデーのイベントでJVCの活動紹介、南アフリカの民芸品（人形とバッグ）を販売してくださいました。また、昨年南アフリカを訪ねられた有志の方々による募金の継続的なご支援も続いています。

（南アフリカ事業担当・原田 恭子）

ガバレ農場で今

今年もレンゲ畑コンサート

恒例のレンゲ畑コンサート「大地は僕らのステージ」が四月二十日、埼玉県吹上町で開かれました。このコンサートは、元JVCスタッフ江原夫妻が営んでいる有機農業農園「ガバレ農場」とJVCの共催で、開発教育活動の一環として毎年開催されています。本当ならレンゲが咲き誇る畑でやるのですが、今年はいにくの雨。仕方なく、近くのホールをお借りして、盲目の歌手田富立さんのギターと歌を満喫しました。コンサートの冒頭にイラクの人々の現状とJVCが取り組んでいる支援活動を報告、市民の支援の必要性を訴えました。

募金をありがとうございます

JVCの活動は皆さまの募金で支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

3月計 3,338,503 円

タイ	0 円
カンボジア	4,205 円
ラオス	621,500 円
ベトナム	10,000 円
エチオピア	0 円
南アフリカ	50,000 円
パレスチナ	1,067,650 円
アフガニスタン	144,739 円
北朝鮮	6,000 円
無指定	695,982 円
緊急：イラク	738,427 円

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

3月計 510,871 円 49 名

③ JVC サポート募金

3月計 110,000 円 71 名

お問い合わせ：岩間邦夫（iwamak@jca.apc.org）

T&E は隔月発行になります

Trial & Error は次号(231号)より、隔月の発行となります。皆様のお手元には、偶数月(2・4・6・8・10・12月)末に届きます。他、緊急の活動や早くお知らせすべきことがある場合には、簡易なニュースレター形式の臨時号を発行いたします。今後は隔月発行が基本になりますが、皆様からのご意見を反映させながらより内容の充実した、かつ身近なものにしていきたいと思います。これからもJVCの活動や会報T&Eへのご意見をご感想をお待ちしております。

(経費削減、他の発信媒体の利用、T&Eのより広範な利用などの点から発行回数を現行年10回から7回としましたが、これについては、先に会員の皆様からアンケートにてご意見をいただいたうえで決定いたしました)

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

第4回 会員総会のお知らせ

日時：2003年6月14日(土) 10:00～12:30

場所：豊島区立豊島区民センター 音楽室・映写室

JR / 地下鉄池袋駅東口より徒歩5分

(別紙案内書の地図参照)

議案：1) 2002年度活動報告および決算報告

2) 2003年度活動計画および予算案



午後(13:30～16:00)、交流会「JVCのつどい」を企画しておりますので、ふるってご参加ください。

※参加される場合は昼食をご持参ください。詳細は同封の別紙案内書をごらんください。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係を作り出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年10回この会報をお届けします。

◎一般会員	10,000円
◎学生会員	5,000円
◎団体会員	30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

ご入会は、次の口座へ郵便振替にて会費をご送金下さい。

口座番号：00150-3-48365
加入者名：JVC会員係

オリエンテーション(説明会)へどうぞ

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要)

第1月曜日 午後7:00～8:30

第2・第4土曜日 午後2:00～3:30

※会場はJVC東京事務所です。

会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら(会員担当)へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数【5月2日現在】 合計 1,633人
正会員 663人 賛助会員 970人

E-mail

jvc@jca.apc.org

JVCのホームページ

<http://www1.jca.apc.org/jvc/>

編集後記

今号からT&Eのレイアウトを担当することになったHですが、前の仕事(SE)のせいか、事務所内の「パソコンがネットワークにつながらない」「絵をCDに焼くってどうやるの?」といった悲鳴(?)に対応するのが主な仕事に。ときにはそれで海外事務所とも電子メールでやり取りします。『Internetで世界がつながった』とは言われますが、人間同士がつながる＝わかりあうには、やっぱり原始的なコミュニケーション(対面しての話し合い)が一番ですね。(H)